



「172のこころ」

先日3歳児さんは黄色のバス（園バス）に乗って、塩田にある牛牧場の見学に出かけました。前日から「牛さん見に行くの?」「動物園に行くよね。」「黄色のバスに乗るの?」など、ワクワク・ドキドキがいっぱいでした。

まず牧場に行く前にお店に寄って、朝しぼりたての牛のミルクを飲みました。いつものミルクとは少し違う味に、「おいしいね〜。」「チーズの味がする。」「砂糖が入っているの?」とさまざまに感じながら、あっという間に飲み干すこどもたちでした。

牧場では牛のおにいさんと一緒に見学をしました。子どもたちは、牛の大きさや鳴き声に驚いたり、うんちのにおいや土・草などのにおいに、思わず「クサイ!」という言葉が出たり、全身でさまざまなことを感じていました。

クサイと感じたにおいのことを、牛のおにいさんから「草は牛さんのご飯、ご飯を食べたらうんちになる。そして、そのうんちが肥料となって、畑が変わっておいしい草になるんだよ。だから、草やうんちや土のにおいをまとめると《命のにおい》って言うんだよ」とおしえてもらいました。まだちょっと難しい話かなと思っていましたが、子どもたちなりに受け止めたようで、園に帰りトイレに行ったあと「命のにおいがするね」と笑いあう姿がありました。

本物に触れ合うことで、言葉だけでなく五感をつかって全身で感じることのできた、楽しい一日になりました。





このあと、製作方法を換え、更に2回試しましたが、飛ぶようにいかないまま、終わりの目録時間が来てしまい、事務局は元の付属の紙飛行機に戻してロボットを完成させたRくん。しかしそこには、Rくんの言動を金言銀言や工夫がたくさん詰まっています。その過程を近くで見ている保育者には、十分に心算させるものでした。長時間を打ち折り紙が、折内折外いくまで行重かきRくんの姿に、「正解」ではなく自分にとっての「最適解」を見つけようとする逞しさが感じられるのです。「まはこはこれではないんだ」という自己肯定感、自己肯定感、は必ず「次の一歩」につながるのでしょう。

2大行事である”The One” on the stage を目前に、ホールで練習を重ねる子どもたちの姿があります。ステージに立つだけで何だかいつもより大人びて見える子。恥ずかしそうにはにかむ子。生き生きと音楽に合わせて表現する子。短い時間のなかで、それぞれが輝きを帯びて見えます。そんななか、ステージを見に来ていた、ある2人の年長さんの姿がありました。

それぞれ体格が違う2人。その2人が、何やら楽しそうにこそこそとお話をしていました。そうするとそのまま、小さな体格の子が大きな体格の子の頭を優しく撫でたのです。そのあと、大きな体格の子が小さな体格の子に上靴を優しく履かせていました。そうしてそのまま、どちらからともなく手を取り合って、お互いのペースの、ちょうど中間の歩で、保育室へと帰っていったのです。

人は、仏として生まれると聞いたことがあります。そして仏はいかようにも形を変えられる水に例えられるそう。それが成長するにつれ、氷へと変わっていく。今日の2人の姿は、まさに水そのもの。そして、自分と相手のちょうど間の心地よい場所を、すでに知っている姿の美しさ。もちろん氷であることは悪ではありません。守るべきものが増えていくと、氷でいなければいけないことももちろんある。

しかし、水の原点を子どもたちに見せてもらった気がして、「あなたはあなたのままでいい」と声を大にして唱えている自分が少しだけ、恥ずかしくなったのです。新しい年は、水の中でほどけ、溶けゆく氷になりたいと感じた時間でした。

保護者の皆様、今年1年間、園の教育・保育にご理解とご協力を賜り本当にありがとうございました。皆様の温かな想いと想いがつながり、子どもたちを優しく包み込んだ1年となりました。どうぞ大切な方々と穏やかな年末年始をお過ごしください。

